



チョコレート
通貨



福澤 俊

チョコレート通貨の誕生

きっかけは些細なものだった。

あるとき、S小学校の三年生太田君が宿題を忘れた。内容は簡単なものだったが、量があり、一からやっていたのでは開始の授業までに間に合わない事は明白だった。そこで、彼は優等生の木田君に宿題を見せてもらい、休み時間の間に必死になって作業をし、授業までに間に合わせることに成功した。これで助かった太田君は、木田君に手持ちの小遣いから50円を渡した。

小学生に50円の取引は魅力的に映った。気を良くした木田君は、出来るだけ学校の宿題をこなすようにして、宿題をやってきていなくてあわせている他の生徒を見つけると、30円から50円程度の取引を提示した。全ての子供に小遣いがある訳ではないので、取引が万事快調だったとは言いがたかったが、それでも少しずつ利益を作っていた。それはS小学校三年生の間にゆっくりと広まり、一ヶ月もする頃には、すっかり定着していた。

こうなると、取引のうまいやつが出てくる。櫛田君がまさにそうだった。彼の家は他の児童よりも小遣いが少なく、月に200円ももらえれば良い方だった。そこで、彼は出来るだけ宿題を早めに片付け、多くの児童と取引し、場合によっては他のクラスに出張してまで商売を行った。場合によっては、前日に宿題を請け負って、その代金をもらう事もあった。あっという間に、彼の手元に1500円ほどの資金が溜まった。そこで、彼はそのお金を持って、近くのCD屋に行って前から欲しかったCDを購入した。

ところが、これは問題だった。興奮のあまり親を前にしながら、その買ってきたCDを楽しそうにかけ始めた。これを見た櫛田君の親は、普段から小額のお菓子も買っているにも関わらず、なぜこんな高価なCDも買えたのか、不審に思い問いただした。最初は黙っていたが、いろいろ事実を突きつけるうちに、彼は宿題の取引の事を白状した。熱心に宿題をやっているのを見て喜んでいたので、それを邪な理由でこなしているのを知って呆然とし、早速担任の中川先生に通報する事になった。

これが自分たちの知らない間にあんまりにも広く浸透していたことを知って、教師たちは愕然とした。すぐに校内の問題になり、校長の結城先生直々に全校生徒に注意を呼びかけ、発覚した場合は更なる宿題を課すという重い措置がとられる事が発表された。これに子供たちは意気消沈した。

ところが、それで全員がめげるとは限らない。恐らく沢田さんの発案だったはずだが、代わりに、近くの駄菓子屋で売っている、5円玉を模したチョコレートで取引しようと言う事になった。これなら、発覚しても普段買っているお菓子と言い訳できるし、いざとなったら食べてしまえば良い。一枚が5円で換算され、数枚重ねる事で宿題の分量と比較して取引される事になった。

これが、その後「チョコレート通貨」と呼ばれる事になった。

児童たちは早速駄菓子屋に走り、少ない手持ちのうちいくつかを5円チョコ、チョコレート通貨に換金した。駄菓子屋の幸田おばあさんは、これを特に問題に思わず、喜んで大量に売った。小学生のブームというのは、時に不明な経緯で突発的に起きるものだとは経験的に理解していたからだ。また、これが自分の利益になるなら、悪い事ではない。幸田おばあさんは、これを歓迎

して、子供たちに大量の5円チョコを売りつけた。あまりに大量に売れるので、一人4つまでの制限を付けたくらいだ。

こんな制限も、子供たちには障害にならなかった。無いなら無いで他のお店に行けば良いのだ。宿題の苦手な子供は体力がある。隣町まで自転車で買い付けにいつてくるなんて、雑作も無い事だった。出来るだけ多くの、そして怪しまれない程度の個数でチョコレート通貨を購入し、次の宿題をやってもらう人を捜した。

これは成功した。実際の5円玉より大きく作られた5円チョコレートは、児童たちの気持ちを大いに盛り上げた。使えば使うほど、まるで王様になったような気分になったのだ。そしてそれを受け取る方も、あくまでお菓子と言い訳できる手軽さが、彼らの罪の意識を和らげてくれた。

そして、これは小学校を超えて普及した。S小学校だけでなく、近くのT小学校、O小学校も巻き込んだ大ブームになったのだ。これは学年を超えて普及した。下は三年生から、上は六年生まで、数百人をその中に含めた(ただし、中学にあがると不思議とその文化は受け継がれなかった)。そのため、周辺から5円チョコが枯渇した。駄菓子屋でも、コンビニに行っても、スーパーに行っても、肝心の5円チョコが無かった。そのため、5円チョコの価値は高騰し、従来よりも少ない数で宿題が取引された。

こうなると、欲望に火がつき始める。そのうち、誰かがチョコレートが作られている工場が自転車でいける近所にある事を発見した。T小学校の横田さんは、一番近いという事もあって、時々その工場の前まで足を運んでは、出てくるトラックを物欲しそうに眺めていた。ただ、トラックで運ばれる限りは、彼らにとっては手が出せず、指をくわえて見ているしか無かった。中には、通りかかった社員に売ってくれるようにもちかける子もいたが、笑ってすげなく返されるのがオチだった。

とにかくにも、チョコレート通貨は、こうした擬似的な経済原理を小学生の間に植え付けたのだった。

ある日、一つの計画を立てられる事になった。枯渴するチョコレート独占するべく、チョコレート工場から強奪するというものだった。当初の思いつきはT小学校の五年生山中さん。山中さんは性格に少々荒い所があり、周囲に強気に出るタイプである事が知られていた。その山中さんが、同じクラスの、仲の良かった久下さんにこの計画を持ち出した。ただ、冷静だった久下さんは話を聞いて無茶だと返し、思いつきは単なる思いつきで終わった。

ところが、そのT小学校の五年生の社会見学の課題で、その工場への見学が決まった。チョコレートブームは教師たちの知る所でもあったので、その勢いもあって、工場への見学は全会一致で決定した。

そうして社会科見学に山中さん、久下さんを含む小学五年生120名が参加した。両者はこれを好機と捕らえた。ここでうまく穴を見つければ、チョコレート工場の襲撃が可能なのだ。当日は、普段の気の入らない授業と違って、見学は熱気を帯びた。山中さん、久下さん以外にも工場の至る所を皆手元のメモにスケッチした。敷地の入り口から建物に至るまでの道、建物に入ってから先の通路、チョコレートを作る機械の配置、チョコレート製造工程の流れ、お店への出荷とみんなこぞってメモを作った。みんなが熱心になる様子に小学五年生の担任全員が感心した。

見学の帰り、山中さん、久下さん、そして彼女らと仲の良かった武井君が山中さんの自宅に集合した。三人は意気投合し、最初に山中さんの言い出した案に賛同、自分たちの作ったメモを使って工場の様子の再現を試みた。そのおかげで、大体の位置関係は把握でき、どこに行けば箱詰めになったチョコレートを手に入れるかの見当をつけた。

翌日は、前日の工場見学に関する感想文をだす課題があった。山中さんと久下さんは詳しい解説とともにそれらしい美辞麗句を並べた、よくよく立派な成果を提出し、宿題を良く忘れる二人にしてはなかなかの出来と担任の福田先生も感心していた。

そして三日後の金曜日、三人はチョコレート工場を襲撃するべく集合した。前日までに計画は組み立てられていた。まずは工場の終わりそうな時間に入り口に待機し、隙を見て侵入、急いで廊下を走り、その先にあるはずの袋詰めのチョコレートを奪取する手はずだった。彼らは、おのおの友達の家で宿泊する旨を告げ、午後4時半に家を出て、最寄駅に向かった。それぞれの両親は普段から互いに仲の良かった友達同士だったので疑う事も無く笑って送り出した。

駅で一つ先にある工場まで、彼らは電車で行き、そこから二十分ほど徒歩で工場のそばまで来た。工場の入り口はまだ稼働していた。この時点で5時10分。工場は6時に終わると聞いていたので、少し時間の余った彼らは近くにある公園で暇をつぶした。言い出しっぺだった山中さんは帽子をかぶり、久下さんと武井君は大きな紙袋を持ってきていた。山中さんはバレたらどうするというつもりで帽子をかぶってきたのだが、残りの二人が学校帰りの服装そのまま、予想より軽装だったので少し呆れてしまった。武井君が6時になった事を確認すると、三人は工場に向かった。

工場では、まだ明かりが点いていた。6時に終了と聞いていた彼らはがっかりしたが、山中さんはどうせすぐ終わるだろうと近くで待機する事を提案した。6時30分頃、工場から続々人が出て

きた。それに気づいた三人は、工場の入り口から出てくる人を、工場の一つ手前の角から眺め、途切れるのを待った。そして、50分頃、ようやく人が途切れた所を見計らって、三人は工場玄関へと走った。

入り口には太い柱が両立し、工場の入り口には警備員がいた。三人は警備員のいる柱の反対側の影に隠れ、人待ちでもしている風を装った。それから数分して、途切れた、と思った瞬間、警備員が下を向いた隙に入り口をくぐり、工場の出入り口と思しき自動ドアへ走った。三人は捕まっては一大事と死にもものぐるいで走ったが、自動ドアの前に立ち止まった刹那、別の警備員の男性が鍵を閉める所だった。久下さんは思わずあっと声を漏らしてしまい、警備員が気づいてしまった。最初は驚いたものの、間違っって迷い込んだのだろうと理解して、叱る風にたしなめながら、警備員は三人を笑顔で敷地の外へ連れて行った。山中さんはかなり不機嫌な顔をしていたが、それでも武井君、久下さんと一緒に工場を出て行った。

三人は最寄り駅まで戻ったが、外泊すると言った以上、行く先が無い。仕方なく、駅そばの公園で一晩を明かす事になった。お金もなく、ご飯もロクに食べられなかったので、翌朝には三人ともくたくたになって帰宅した。久下さんは、自業自得かな、と心の中で不意につぶやいたが、他の二人には明かさなかった。

次の計画

山中さんと久下さんはあれからいつも通り過ごし、武井君は二人と距離をとる事無く過ごしていたが、久下さんのそれとないそぶりから、彼女との距離は少しだけ感じていた。その間も、数少ないチョコレート通貨は密かに流通し、小学生たちの自尊心を満足させたり欲求不満に陥らせたりした。

一ヶ月ほど経ったある日、山中さんは先生にこっぴどく叱られた。3回連続で宿題をやってこなかったからだ。それまではチョコレート通貨で補っていた事が、ここ最近の不足で出来なくなっていたのだ。ふて腐れた山中さんは、再度工場の襲撃を企てた。

まずは以前一緒に行動した久下さんに話してみたが、久下さんはこの申し出を却下した。この反応に山中さんは驚いたが、それでもめげる事無く武井君に話をしてみた。武井君は武井君でこの話に既に興味を失っていたが、とりあえず、暇つぶしと思って乗る事にした。そこで、山中さんは、けんかしやすい性格の工藤君と、時々つるんでいた美樹本さんにも話を持ちかけた。当然最初の反応は芳しくなかったが、それでもチョコレートの山分けを約束して、二人の参加を取り付けた。

この時に、美樹本さんが隣の小学校から参加者を募る事を提案した。同じ小学校だと、情報が出回って見つかるかもしれないと考えたからだ。先の失敗から慎重に事を運びたいと思っている山中さんはこれに賛同した。次の日には美樹本さんが友人に話をし、沢田君、水谷君、横溝さんの三人の参加をとり、結果7人でチョコレート工場に行く事になった。失敗しないために慎重に計画を練る事になり、全員は、前に一夜を明かした駅前の公園に集まる事にした。

公園には山中さんと武井君が工場見学の際のメモに、工場周辺の要素を加えて、計画を相談し合った。まずは美樹本さんが先に侵入して、ボールを投げ込んだので探してほしいと持ちかけて、警備員の注意を引き、その間に残りの6人が工場に入って、チョコレートを探し出す手はずになった。また、特に男子は手にバットなり工具なり、威嚇できるものを持って侵入し、誰かがいた際に追い払えるようにして、その間に山中さん、横溝さんや、手の余った人が袋に詰め込むという計画にした。

7人は電車に乗り、最寄駅から先は山中さんが工場の直前まで案内した。工場のひとつ前の曲がり角で止まり、全員が待機した。小学生なりに悟られないよう、公園で遊んだ帰りのように振る舞ったが、どことなくぎこちなさがあった。沢田君が時計を見ると、5時45分を指していた。

しばらく手持ちの道具で遊んでいると、6時になった。先の経験から、山中さんはもう少し待つよう全員に促した。その一方、美樹本さん一人が工場の前に進み、様子をうかがった。カーンカーンと言う鐘が鳴り響き、少しずつ社員が出てくる。

美樹本さんは社員を一人一人数えながら、実行の時を待った。あと一人、あと一人、と人が出てくるたびに緊張の度合いが高まっていった。

意を決し、美樹本さんが歩き出した。入り口の警備員の前まで進むと、美樹本さんは遊んでいて敷地内にボールが入った事を告げた。まだ背が低く、幼い風体の美樹本さんに警備員は孫でもあやすように対応し、二人で敷地内に入っていった。その一瞬、隙が出来た。美樹本さんの様子をうかがいながら、ギリギリまで控えていた小学生たちは、頭の中を侵入する事で一杯にしなから、警備員の前を走り去った。

工場のドアの前には、まだ人がいた。小学生たち6人は建物の影を見つけ、その場に隠れた。少しずつ人が出てくる。3人、2人とまばらに続くが、なかなか途切れない。しびれを切らした沢田君がせーのっと声をかけ、一斉に走り出した。

間一髪で小学生たちは工場内に侵入した。最初はどこへ進むかと迷ったが、武井君が近くにトイレを見つけると、そこにみんな走り込んだ。トイレには複数の大使用の個室があったので、二手に分散してみんな隠れた。みんなで息をひそめる。足音が何回か聞こえたが、しばらくするとそれも途切れた。沢田君がトイレの壁を叩くと、向こう側から山中さんが同じように叩き返した。それが合図になった。

6人の小学生はトイレを出て、うろ覚えの地図を頼りに、工場内で菓子を詰めたダンボールのある倉庫に向かった。工場内は足音が響く。別方向からキュッと足音が鳴るたびに全員口から心臓が出てそうなほど緊張したが、歩き続けるとそれも気にならなくなり、徐々に大胆になっていった。

廊下を何度か進むと、出荷用に整えられたダンボールが山のように高く積まれている倉庫に見つけた。沢田君が電気を付け、みんなで手分けして、その中からチョコレートを探す事になったが、なかなか見つからなかった。時間だけが過ぎて、焦りも見え始めたとき、武井君がチョコレートのマークのあるダンボールを見つけた。みんなで歓声をあげ、工藤君、山中さん、溝口さんは袋にチョコレートを詰め、沢田君、水谷君、武井君は持っていたバットや木の棒を片手に入り口に立つ事になった。

それからたぶん5分が過ぎた。彼らには、1時間くらい過ぎたように感じられたかもしれない。遠くから倉庫に迫る足音が聞こえてきた。コツンコツンと固い足音が少しずつ近づいてくる。足音に気づいた沢田君は、周囲に知らせず、電気を消した。チョコレートを詰めていた三人はその場に身を隠し、武器を持った男の子たちは扉の左右に散った。

足音が止まり、扉のノブを回す音が聞こえた。空いているドアを不審に思ったその人物は、中に入ってきた。一閃、バットを持った武井君が襲いかかった。男性の悲鳴が漏れる。小学生たちは一斉に男性に飛びかかった。男性は大きくけりを放ち、小学生たちを吹き飛ばした。

倒れた沢田君は、もう一度起き上がって男性に襲いかかった。それに続いて水谷君も足にしがみついた。一方で山中さんは袋に入ったチョコレートをまき散らしながら倉庫の入り口を抜けて、一人で廊下へ走り出した。山中さんを見た男性の怒鳴り声が響く。それに気づいた、工場内にまだ残っていた社員が応答する。そのうちの一人が山中さんを追いかけ始めた。

山中さんは前方に人を見つけると今度は逆方向に走り出した。気が動転したのか、途中に見つけた階段を二階へと上がってしまった。こうなっては、逆に追いつめられるだけだった。階段の先に休憩スペースが開けている。そこまでたどりついて、窓ガラスがはめ込まれ、鍵がかかっているのに気づいた。山中さんは焦りながらどンドンとガラスを叩く。足音が更に近づく。ガラスの脇に鍵があるのに気づいて、必死の思いで鍵を開けて、窓を抜けた。そこには、屋根の無いテラスが開けていた。それでも山中さんはテラスを走った。走った所で、先がある訳でもない。テラスの縁で山中さんは止まってしまった。

そこに社員が一人たどり着く。山中さんに声をかけて静止しようとするも、山中さんはおびえて動こうとしない。しびれを切らした社員は一步一步近づいてくる。その度に山中さんの焦りは恐怖へと変わる。社員が手を伸ばし、山中さんの腕を掴もうとした瞬間、山中さんの体が闇夜に消えた。

ガンっという鈍い音がする。

チョコレート通貨の終わり

小学生7名によるチョコレート工場の襲撃は、一人の死亡者を出して終わった。襲撃の翌日、事態を知った久下さんは泣きながら担任教師に報告に行った。それに武井君もそれに続き、嗚咽で話にならない時間が続いた。その時に、初めて教師たちはチョコレート通貨の存在を知った。

直ちに職員会議にて報告が行われ、教育委員会や各小学校と連携して、チョコレート通貨にまつわるものを禁止するとの令を出すと同時に、工場への謝罪と保護者への説明を計画した。あまりの自体に、教師よっては授業にならないものもいた。

翌日のT小学校では、詳細はぼかしながらも、山中さんの死亡と、チョコレート通貨の禁止が宣言された。中には泣き出す子供もいたが、多くは山中さんと面識が無く、芳しい反応はなかった。

それでも、熱くなったブームを冷ますには十分だった。チョコレート通貨は、まるでそれまで存在した事が無かったかのように誰も口にしなくなった。特に山中さんと親しかった人たちの間では、口にするのもはばかられ、におわせるような事を言えば誰からも睨みが飛んできた。

こうして、チョコレート通貨と、その顛末は、ごく一部の人の記憶にのみ残り、その存在は抹消された。

チョコレート通貨

<http://p.booklog.jp/book/49262>

著者：福澤 俊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukichi99/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/49262>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/49262>



チョコレート通貨 by 福澤 俊 is licensed under a [Creative Commons 表示 3.0 非移植 License](https://creativecommons.org/licenses/by/3.0/).

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.